英語授業研究学会
Japan Association for the Study of Teaching English
英語授業研究学会会報
第１０８ 号
２０２５年９月発行

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・1
第 36 回全国大会報告 ・・・・2
お知らせ・編集後記・・・・・8

巻頭言

変わりゆく時代に、変わらぬ問いを抱えて

英語授業研究学会第36回全国大会 実行委員長
豊嶋 正貴（國學院大學 他）

第36回全国大会は、国士舘大学世田谷キャンパスにおいて2日間の対面開催となり、延べ495名もの参加者をお迎えすることができました。コロナ禍以降、最多の参加者数となり、初日の懇親会にも70名を超える先生方が集ってくださいました。再び、現場の熱が戻ってきた、そう感じる瞬間の連続でした。ご参加くださった皆さま、そして企画・運営に携わってくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

今回の大会テーマは「これからの時代に求められる英語教育とは」。生成 AI、エンゲージメント、教科のチームワーク、メタバース、そして、これからの教師の役割とは何か、普遍的に変わらない教師の姿とは何か。めまぐるしく変化する教育環境の中で、2日間を通して私たちは、それでもなお変わらず問い続けるべき教育の本質に立ち返る機会を得たように思います。

本学会の最大の魅力は、そうした「変わらない問い」を、日々の授業という最も現実的で実践的な場から見つめ直せるところにあります。授業映像をもとに語り合い、研究と実践が交わる分科会を通して、多くの気づきや学びが生まれました。テクノロジーが進化しても、変わらぬ問いを胸に、子どもたちの学びを支える教師でありたい。そう願う先生方が集う場として、本学会の価値はますます高まっていくことでしょう。

実行委員長という重責を、実行委員会、運営委員の先生方、そして、今回ご発表いただいた先生方、たくさんの方に支えられながら無事に務めることができました。この学びの場が今後も、多くの先生方の支えとなり、英語教育の未来を拓く原動力であり続けることを心より願っています。

第 36 回全国大会報告

●日 時: 2025 年8月7日(木) 12:50～17:10　 8 日(金)9:30～16:50

●会 場: 国士舘大学世田谷キャンパス・梅が丘校舎

●内 容:

【第1日目】　総合司会:松尾 真太郎(筑波大学附属駒場中学校・高等学校)

1 講演「AI 時代の英語教育―我々は失業してしまうのか」

講 師:竹内 理(関西大学)

司 会:吹原 顕子(大阪商業大学)

冒頭、「AI の賢さは人間を超えたのか」という問いからはじまり、フロアを交えて、生成 AI や、その活用について考えるようなご講演であった。

近年 AI は話題のトピックであり、学校でも AI のより良い活用について議論されている。AIが優れている面は多々あるが、同時に苦手とすることもある。その点を理解し、生成AIを使うことが大切である。AI が得意なこととして、英文の添削とフィードバックの提示・自動採点、多肢選択問題の生成・言語タスクの生成などが挙げられた。しかし、ただ使うのではなく、プロンプト次第で上手くいくということをきちんと理解しておかなければならない。役割や文脈、目的を与えることで、より有効なものとなる。また、苦手なこととしては、生徒の感情を読み取る、生徒同士のコミュニケーションを図る、批判的な視点をもちながら処理をするということである。自分自身の授業を振り返っても、AI を上手く活用できた時もあれば、なかなか上手くいかないこともあり、どのように AI を活用するかは近々の課題である。クリティカルな思考をしたり、即興的に対応し人間関係を構築したりすることは、やはり人間だからこそできることである。すべてを AI に頼ればいい、ということではない。我々が AI についてきちんと理解し、生徒の発達段階に応じて使用方法を吟味することが大事であるということを再確認した。　　(文責 山武市立成東東中学校 小山優子)

2 映像による高等学校授業研究協議

「高 2・英語コミュニケーションⅡ:インタラクションを通して題材を深める授業」

授業者:宮崎 貴弘(神戸市立葺合高等学校)

分析者:津久井 貴之(群馬大学)

教科書の題材に関してクラスメイトが考えを書いたライティングを読み、その内容をさらにペアの生徒に自分のコメントも付け加えながらレポートするという活動から授業はスタート。その後、数名の生徒が1人ずつ前に出てきて発表をし、その内容について教師と1対1のインタラクションを行った。生徒の発話を引き出し、内容を深めるために数多くの質問をし、生徒が言いたいことを言えるように一生懸命手助けしてやりとりをする授業者の宮崎先生の実直な姿が大変印象的だった。また、生徒の発話を常にしっかりと受け止め、丁寧にリアクションをし、生徒が途中で止まってしまっても教師側がめげずに忍耐強く見守っていた。このような「間」を宮崎先生がしっかり持っていることを分析者の津久井先生が具体的な数字を示して解説された。例えば、教師が生徒に問いかけをしてから、3秒・7秒の空白の時間を作り、生徒に自ら考えさせる「間」が授業の随所に見られた。他にも、1人の生徒と6分13秒も英語でインタラクションを続けていたことが示され、何を言っても受け止めてもらえると安心して生徒が英語を話すことができる教室環境を宮崎先生が

築き上げてきたことが成果として確認された。

協議では、ミラーリングなどの教師自身の行動の変化や recast の有効性などについてフロアから活発に意見が出された。（文責 お茶の水女子大学附属高等学校 遊馬智美）

3 課題別分科会

＜第 1 会場＞「教育現場における生成 AI の活用と展望」

提案者：土田 俊輔（富山県立南砺福野高等学校）
中田 未来 （大阪教育大学附属池田中学校）
兼コーディネーター：豊嶋 正貴（國學院大學 他）

全国大会 1 日目の最後のプログラムである課題別分科会第 1 会場では、3 名の先生が生成 AI を用いた英語教育の実践と課題を紹介した。土田先生は、AI を活用した授業での実践を紹介した。生徒が AI に添削を依頼し記録を蓄積する活動で、教員は添削業務の効率化や心身のゆとりを得られ、生徒はアウトプット機会の増加や自己修正力の向上が見られると報告した。一方で、AI の結果を鵜呑みにする生徒も多く、自律的に学習へ向かわせる仕掛けづくりが課題とされた。中田先生は、「ワクワクする未来のスピーチ」という活動において、アイデア創出段階で AI をカウンセラーとして利用する方法を提案した。その後、生徒が自力で英文を作成し、最終的に教員と AI が協働して原稿を完成させる流れを紹介した。生徒が AI の返答を見極める力を養う必要性や、相手に伝わる表現の工夫を AI を通じて考えさせることの有効性が強調された。豊嶋先生は、大学の英語授業における実践例を報告した。AI を活用した英会話練習に加えて、練習を通して AI から得たフィードバックを活かす活動が紹介された。AI は学びを支える有効な手段である一方、それを活かすには学習者自身の英語力が不可欠であるとも強調した。

質疑応答では、生徒が AI 利用に疲弊する際の情緒的支援や、文字中心の活動に偏りリーディング重視となる懸念が挙げられ、教員の関わり方が問われた。総じて、AI 活用は教育効果を高める一方、生徒の主体性や技能バランスをどう確保するかが重要な論点とされた。

（文責 新島学園中学校・高等学校 兼岩明日香）

＜第 2 会場＞「学習者のエンゲージメントを高める指導の工夫」

提案者：川上 光太（ドルトン東京学園中等部・高等部）
加藤 京子（愛徳学園高等学校）
兼コーディネーター：和田 玲（長崎大学）

本分科会は、加藤京子先生の御講演、川上光太先生の模擬授業、和田玲先生の御講演および模擬授業の三部構成であった。加藤先生の御講演は、大村はま先生や林竹二先生といった著名な先人の生き様や名言を引用しつつ、これまでの数十年の御自身の御経験や御実践を基にしたものであった。まさに圧巻であり、理論や技術だけでは決して到達しえない内容であった。川上先生の御実践は、一秒たりとも生徒を飽きさせない工夫がなされていた。実際に体験する中で、技能がコミュニケーションの中で高まっていく実感があった。和田先生のパートでは、エンゲージメントを体系的に整理するとともに、理論的に裏付けられた技法であるクリフハンガー等が用いられた授業を体験した。

エンゲージメントという多様で奥深い概念を、加藤先生は「心」、川上先生は「技」、和田先生は「体」の

面から捉え、生徒のエンゲージメントを高めるための「心技体」を総合的に理解することができる内容であったと私は感じた。加藤先生もおっしゃっていたが、「エンゲージメント」は英語教育の「目的」ではない。しかし、その目的を達成するための土台であり、「いい授業」の共通基盤ではあるはずだ。分科会の全編を通じてそのようなことを考えていた。　　（文責　神奈川県立大船高等学校　海鋒　拓也）

＜第 3 会場＞「教科チームワークの構築とその効果」

提案者：高杉　達也（筑波大学附属中学校）
野田　玲子（大阪府立四條畷高等学校）
兼コーディネーター：土屋　雅徳（川崎市立有馬中学校）

３人の先生方から、授業改善が進まない最大の理由と思われる「同僚問題」解決のための示唆をいただいた。

高杉先生は教員が同じ方向を向く大切さについて話され、押しつけるのではなく共有しながら、つまり「協働」することにより新しい価値観が生まれ、協働は日頃の関係性から成り立つとのお話。筑波大附属中では、数十年分のスライドや教材が共有され、教員が同じ方向を向いているので、欠勤時には他の教員が自習監督ではなく代打で登板が可能との説明があった。

野田先生からは多人数の教員で学年を担当するので情報共有が必要。文字化したものを Web 上で共有しているとの説明。教師のチームワークが生徒の安心感を生み、それが生徒の前向きな姿勢に繋がるとのお話があった。教材ばかりではなく、自分が担当していない他クラスの生徒の良いアウトプットを教員が共有する点も紹介され、また、定期テストのフォーマットの定形化も生徒の不安感減少に繋がっているとの説明があった。

土屋先生の勤務校は川崎市の研究推進校に指定され、教員集団の中には当初、当惑があったものの、目標を設定することにより教科チームワークの構築を推し進め、失敗やうまくいったことを同僚間で共有する組織に変え、自分の思いを発表できる生徒を作るという共通認識を持ち得たこと、そして生徒のポテンシャルを発揮させる手法に変えたことにより「生徒の変化」が生じ、ひいてはそれが教員側のモチベーションに繋がったとのお話。

お三方に共通していたのは、情報共有・チームワーク。大いに参考にしたいものだ。

（文責　東京都市大学付属中学校・高等学校　高橋 信博）

１日目の様子

【第2日目】　総合司会：兼岩 明日香（新島学園中学校・高等学校）

４　レクチャー

「これからの英語教育にメタバースが必要な１０の理由」

講 師：池田 勝久（文部科学省初等中等教育局主任教科書調査官）

司 会：五十嵐 浩子（国士舘大学）

メタバースは、今までにない新たな「目的・場面・状況」を設定し、疑似的であることの良さを生かした学習活動、個別の学習活動を創ることができる技術となる。

メタバースとは、Meta（高次）＋Universe（宇宙）の合成語になる。VR（仮想現実）、AR（拡張現実）、MR（複合現実）とは異なる一面を持っており、メタバースでは他者との関わりがあることが特徴だ。

池田先生からご紹介いただいた例で強く印象に残っていることは、学校に来られない生徒がメタバースの世界で他者と関わりながら「意見交換」や「疑似体験」を通して学習を進めることができる可能性があり、英語であれば発表の練習において、AI から文法や発音、内容などの指導も受けることができるということだ。教室の一斉授業では手の届かない部分にメタバースを取り入れることができれば、生徒は自分の選んだ課題や学習活動に取り組むことができ、英語学習のゴール達成へ向けた学習活動の幅を広げることができると感じた。現場では ICT 教育の推進が急速に進められている。数多くのソフトが教員に紹介され、様々な教科、場面で活用されている。生徒の個性を引き出すため、生徒の個性に適した学習を推進するためにも、私たち教員は視野を広げ続ける努力を怠ってはいけないと感じた。

（文責 川崎市立有馬中学校 土屋雅徳）

5　映像による中学校授業研究協議

「中2：教科書の場面と本文を自己表現に活かすための工夫」

授業者：中島　真紀子（筑波大学附属中学校）
分析者：髙橋　一幸（神奈川大学）

本時では、「世界の水問題」について扱う題材をもとに、本文を活用し、「水以外の問題」について伝え合う活動を行った。一見、1時間として扱うには負荷の大きい活動のように思えるが、緻密な backward design が生徒の変容を促していた。導入では、水問題に関連する動画や写真を視聴させ、それらを食い入るように視聴する生徒の姿があった。教科書本文の復習、overlapping、buzz reading、穴あき音読、read and look up（必要に応じて buzz reading に戻らせる）の音読練習を十分に行ったあと、教科書本文のリテリングへと移るのだが、「登場人物が、隣のクラスの留学生（教科書には出てこないオリジナルキャラ）に水問題についてたずねられた」という対話場面を想定した上で行わせていた。そうすることで、information gap のない生徒同士のリテリングを成立させ、ペア活動は自然な対話形式となり、生徒も楽しみながら取り組んでいた。その後の「水問題以外の問題を伝え合う」活動では、教師が事前に「学校に通えない子供」について問題点を3文の日本語で示したスライドを準備しており、生徒は教科書の表現を活用しながらそれを英訳する形で表現していた。ドリル的な活動も、意味のある目的や場面を設定し、徹底的に活用する過程で、生徒は楽しみながらも、「使える英語」として自己表現力を高めていた。

（文責　小田原市立白鷗中学校　髙橋　ひろみ）

6 シンポジウム

「これからの英語教育のために今できること」

登壇者：狩野　晶子（上智大学短期大学部）
工藤　洋路（東京外国語大学）
松下　信之（大阪府教育庁）
司　会：久保野　雅史（神奈川大学）

大会の最後のプログラムであるシンポジウムは、「変化の激しい時代だからこそ、授業の本質や『不易な部分』を考える」という久保野会長の導入から始まり、これからの英語教育のあり方について、多角的な視点から議論が展開された。

1．英語教育の歴史と「流暢性」の重要性

久保野会長は、日本の英語教育の 50 年の歴史を振り返り、その変遷を概観した。

これを受けて、狩野先生は、児童英語導入後の教育の変化に触れ、特に「流暢性（fluency）」の重要性を強調した。流暢性は単なる速さではなく、理解可能性（comprehensibility）と高い相関があることが指摘された。つまり、流暢な話し方は、聞き手の理解を助ける重要な要素となる。特に、幼少期における「チャンク（chunk）」の学習が、流暢性の獲得に長期的に寄与すると述べられた。チャンクとは「How are you?」のように、ひとまとまりの意味を持つ語句のセットであり、子どもが会話の「足場」として活用することで、後に文法構造を分析・応用する土台となると説明された。

2. デジタル化時代の教育と教員の役割

工藤先生は、「一人一台端末」が個別最適化に繋がるのかという問いを提起した。伝統的な一斉授業でも、生徒一人ひとりが異なる学びを得ている可能性を指摘し、その個別性を教師が確認することの重要性を強調した。また、授業における生徒の発話時間は非常に短いことが多い現状を課題とし、学んだ知識を場面に応じて活用できる実践的な活動を促す必要性を示した。

松下先生は、AI を活用した授業における教員の役割について再考した。AI の完璧な英語や評価に依存するあまり、発話内容よりも発音や流暢性だけを重視してしまう危険性を指摘し、完璧でなくても、生徒が主体的に発話し、フィードバックを得るプロセスこそが重要であると述べ、教師が「勇気づけ、褒め、点を与える」ことの価値を強調した。

3. 質疑応答と今後の課題

パネルディスカッションでは、活発な議論が交わされた。学習者のレベルが上がるにつれて、チャンクからより高度な表現へと移行する際の指導の難しさや、「教養のある英語力」の必要性が議論された。また、「ネイティブはこう言う」といった安易な情報に流されず、多様な英語に触れ、自分で「正しい英語」を判断できる感覚を養うことの重要性が指摘された。

4. まとめ：今後の英語教育に向けて

シンポジウム全体を通して、以下の 3 点が特に強調された。

- 働き方改革の中でも、質の高い授業づくりは譲れない。（松下先生）
- 生徒がお互いの良い点を学び合えるような、心地よい授業の雰囲気づくりが重要。（工藤先生）
- 子どもの個性や得意・不得意を認め、それぞれの良さを引き出す教育が必要。（狩野先生）

最後に、久保野会長は、生徒がどこでつまずいているかを見抜く「アンテナの高さ」を持ち、「町の名医」のような存在を目指すこと、そして「言葉の使い手」として母語の感覚も磨くことの重要性を述べ、シンポジウムを締めくくった。　（文責　群馬・吉岡町立吉岡中学校　井上晋太郎）

2日目の様子

編集後記

巻頭言および本学会のホームページでもご報告のとおり、8月7日～8日に行われた第36回英語授業研究学会全国大会への参加者は、2日間を通じて延べ495名でした。改めましてお礼申し上げます。残念ながら参加がかなわなかったみなさまにも、本号を通じて大会当日の熱気が伝われば幸いです。

本号の発行に向けては関東支部の会報担当のみならず、全国大会の広報係のみなさま、そして参会記を執筆いただいたみなさまに多大なるご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。

関西支部第36回秋季研究大会は11月2日（日）、関東支部第31回秋季研究大会は11月30日（日）にそれぞれ開催されます。詳細はホームページをご確認ください。

（筑波大学附属駒場中・高等学校　松尾真太郎）

【進捗状況の報告とお願い】

「会報」バックナンバーのデジタル化について

皆様にご協力いただいたお陰で発掘が進み、デジタル化の完了まで、あと一息というところまで来ました。残り 4 号が見つかれば完成です。以下の号をお持ちの方は、担当の久保野（ft101763jt@jindai.jp）までお知らせ下さい。さらなるご協力をよろしくお願いします。

28 号（1997）、32 号（1998）、 47 号（2002）、69 号（2008）